

聖書：ルカの福音書 14 章 12～24 節

説教：神の国の食卓

1 食卓に招かれる者

パリサイ派の指導者は、人々を食事の席に招待しました。その中にイエスもおられます。ゲストの座る席は特に指定されていません。人々は競って高い所の席に座ろうときょろきょろしていました。それをご覧になったイエスは、「招かれた者は、あとで恥をかくことのないように末席に着きなさい」と戒めました。それが前回までのあらすじです。

続く今日の箇所では、宴会にはどのような人を招待すべきなのかを語ります。12 節。「昼食や夕食のふるまいをするなら、友人、兄弟、親族、近所の金持ちなどと呼んではいけません。」そして 13 節。「むしろ、貧しい者、からだの不自由な者、足のなえた者、盲人たちを招きなさい。」

これ聞いていたある人はこう言いました。「神の国で食事をする人は、なんと幸いなことでしょう。」

ここを読んでどう思いますか。皆さんは昼食や夕食に誰かを招待するとしたら、どんな人を呼びますか。さすがに近所の金持ちを呼ぶことはないかもしれません。でも友人は呼びます。兄弟も呼びます。親戚ももちろん呼びます。ところがイエスはそうしてはいけないうように聞こえます。もし本当に呼んではいけないというのなら、クリスチャンはずいぶんと窮屈なものになってしまいうです。もちろんそんなはずはありません。では、どういうことなのか。16 節以降で語られるたとえ話を見ながらそのこと

を考えていきます。実は、このたとえ話、一箇所だけ屈に合わないところがあります。それはどんなことか。最後のところで種明かしをする予定です。

2 たとえ話

1) 宴会に招いたが

ある家の主人は宴会を開くことにしました。招待するお客の名簿を作り、その人たちに前もって招待状を送りました。それから何日か経って、宴会の用意がととのった頃、使いの者を送り、「どうぞおいでください」と伝えます。ところが招かれたお客はいろいろな理由を挙げて招待を断り始めます。

最初の人はこちら言います。「畑を買ったので、どうしても見にでかけなければなりません。」次の人は、「五くびきの牛を買ったので、それをためしに行くところです」と言います。そして三番目の人は、「結婚したので、いくことができません」と答えます。

最初に確認しておきますと、このたとえ話に出て来る宴会の主人は父なる神様のことです。たとえ話のいつものパターンです。先ほど 15 節である人が、「神の国で食事をする人は、なんと幸いなことでしょう」と言っていました。主人が催す宴会とは神の国の食事のことを指します。

このたとえ話。何を言いたいのでしょうか。結論はひとまず脇に置くことにして、素直な心でここを読んでみましょう。最初の人、「畑を買ったので、いますぐそれを見に行か

なければならぬ」と言って、招待を断りました。二番目の人は、「十匹の牛を買ったけれど、丈夫できちんと働ける牛かどうかを自分の目で確かめるために行かなければならぬ。」そう言って断りました。三番目の人はもっとわかりやすい。「結婚したので、今は行きません。」

どうですか、招待を断った理由。なにか非常識なことを言っていますか。皆さんだって家を買ってお金を払ったらきちんとした家かどうか自分の目で確かめなければ気が済まないはずです。新車を買ったら、早くハンドルを握って走り確かめたい。まして、今結婚式を終えたばかりの時に、ほかの宴会に出かける気にはなりません。招待を断った人たち。なにも神をののしったわけではない。大きな罪を犯したわけでもない。ただ、普段はしないような大きな買い物をしたとか、人生の大切な節目となる結婚したばかりだとか、特別な時にたまたまたあたって、都合がつかなかっただけです。もし私がこの三人のいずれかであっても、同じように招待を断るでしょう。

2) おこる主人

いっぽう家の主人は、みな欠席しますと返事をした事に腹を立てます。せっかく招待状を送り、時間をかけ、お金をかけ、いろいろな配慮をしながら宴会の準備をしてきました。それを断られたのですから、主人の気持ちは理解できます。わからないのはその後です。

21 節の途中から。「急いで町の大通りや路地に出て行って、貧しい者や、からだの不自由な者や、盲人や、足のなえた者たちをここに連れて来なさい。」それでも宴会の席に余

裕があると知った主人は、こうも言います。23 節。「街道や垣根のところに出かけて行って、この家がいっぱいになるように、無理にでも人々を連れて来なさい。」

招待したお客がみな断ってきたので、頭に来て宴会を中止したというころまではまだわかります。わからないのは、なぜ貧しい人たちを招くのか。なぜ、からだの不自由な者たち、盲人、足のなえた者たちと言った、当時の罪人と思われていた人たちを招こうとしたのかです。

加えて、たとえ話の締めくくりはこうなっています。「言うておくが、あの招待されていた人たちの中で、私の食事を味わう者は、ひとりもないのです。」なにか脅迫されているようにさえ聞こえます。神の食卓に招かれた者は、目の前にどんな用事があっても決して断ってはならない。すぐに神の食卓に招かれるべきである。どうしても、そんな教訓話に聞こえてしまいます。では皆さん、そうできますか。私は自信がありません。

3 イエス

1) 報いはない

このたとえ話は 12 節以降の、だれを食事に招くのかという話と関係しています。その所にもう一度戻ります。イエスは祝宴を催す場合は、貧しい者たちを招きなさいと言いました。普通招待された者は、手ぶらというわけにはいきません。常識のある人はお土産を持参します。あるいは、お返しに今度はうちに来てくださいと逆に招待します。

ところが貧しい人たちはお土産を持ってくることもできなければ、お返しに食事に招待することもできません。イエスは、だからこそ貧しい者たちを招くべきだと言われま

す。招待する側から見れば、そんなお客は、手ぶらでやって来て、さんざん飲んで食べ、満腹になったら何も置かないで帰っていく。失礼なやつです。あんな人たちのために自分が食事を用意したかと思うと、腹が立つ。ばかばかしい限りです。報いはありません。

2) 断られるイエス

いったいこれらの話はどう考えたらよいのでしょうか。このたとえ話、なんとなく後味が悪い印象でしたが、でももう一度見直してみたらどうでしょう。確かにいろいろないきさつはありました。けれども、結局貧しい人たちが神の国の食卓に招かれました。それも、「この家がいっぱいになるように、無理にでも人々を連れて来なさい」というくらいです。いつものことですが、イエスが何かを語る時、自分とは無関係なことを語ることはありません。気づきにくいようにではありますが、必ずご自分のこととして語ろうとしています。よく見ると、このたとえ話の中に登場する「しもべ」はイエスの姿と重なっています。

この方は、私たちを神の食卓に招くため、父なる神のもとからイスラエルという国に遣わされてきました。イスラエルの人々を神の国に招く。それがこの方の使命でした。旧約の時代から預言者を通して救い主がやがて遣わされてきて、あなたがたを救う。そのような神のみことばをずっと信じて待ち望んでいました。イスラエルの人々は、真っ先に神の国への招待状を受け取っていた人たちだったのです。

ところがイエスはどんな扱いを受けました。みなイエスを拒み、救い主だと認めず、十字架に追いやって殺してしまいました。

3) 貧しい者たちが最初に招かれる

わざわざ遣わされてきたのに殺され、だれも神の国に招くことができません。それだけではない。たくさんの苦勞をしたというのに、何の報い也没有。だれの目にも、イエスのミッションは失敗したかのように見えました。

でも、このたとえ話によれば、そこからまったく意外な方向に話が展開していくのです。招待していた人たちがイエスを拒み、十字架で殺したために、何が起きたか。その結果、貧しい者たちが神の国の食卓に招かれる道が開かれました。ふつう宴会に招待されたなら、お祝いを包まなければとか、会費制ですとか、すぐにそんなことを心配します。けれども、神の国の食卓に招待された人は、お祝いを包むとか、お返しをしなければとか、そんなことは最初から期待されていません。要求もされません。

そもそも貧しい者だけが招かれたのです。神は、私たちには何もないと言うことを知っておられて招きます。言い換えれば、神に救われるとき、私たちは手ぶらでよい。そう言っています。

世間では、「ただより恐いものはない」と、よく言います。後から高額な請求書が送りつけられるのではないか。そんな心配をしてみます。心配いりません。私たちが貧しくて払えないことを知っておられる神は、イエスを身代わりにして十字架で罪の贖いの代価を支払ってくださいました。

このたとえ話の21節に「怒った主人は」とあります。ついつい恐い神を思い浮かべてしまいます。神が怒ったので、貧しい者たちが最初に神の国の食卓に招かれるように

なった。そういう流れになっています。でもよく考えてみてください。全能の神が何も知らないはずはありません。イスラエルが神の招待を拒むことは最初からわかっていたはずではないですか。このたとえ話で一箇所理屈に合わないことがあると言ったのは、このことです。「怒った」と言いながら、実は神が最初に招きたかったのは、貧しい者たちではないですか。この方は、ご自分が用意した大宴会場を貧しい者たちでぎゅうぎゅう詰めにしたいのです。神である方が怒って、ご自分のひとり子を犠牲にされるでしょうか。そんなはずはありません。神は喜んで貧しい者のためにいのちを捨ててくださいました。

神の恵みに感謝します。